

2023 度 看護系学会等社会保険連合研究助成 研究報告要旨

【テーマ】 エビデンスに基づく在宅ケア実践ガイドラインの改訂版の策定のためのシステマティックレビューとメタアナリシス

【研究者名】 尾崎 章子（日本在宅ケア学会） 他9名

【目的】 在宅においてケアを必要とする人々に対し、ケアの受け手の価値観や意向を尊重しつつ、科学的根拠を見極めたケア実践が求められている。診療（ケア）ガイドラインは定期的に改訂して最新の状態にしておく必要がある。本研究では、日本在宅ケア学会が2022年に策定した「エビデンスにもとづく在宅ケア実践ガイドライン2022」の改訂を行うことを目的とした。

【方法】 日本医療機能評価機構(Minds)のガイドライン作成手法に則り、在宅ケアにおける重要課題10項目について、クリニカルクエスチョン(Clinical Question; CQ)を設定し、システマティックレビューとメタアナリシスを行い、各CQに関するエビデンスを評価し、改訂版ガイドラインを策定した。

【結果】 高齢者の包括的アセスメントツールを用いたアセスメントは、精神的QOLの有意な向上を認めた。エビデンスの質は「中」である。

身体機能低下のある在宅高齢者への複合的介入は、身体機能の改善に有効である。要介護高齢者への栄養士による個別訪問を含む多職種による食支援は、体重増加、生活の質の向上に有効である。エビデンスの質は「非常に低」である。

午前から午後を通しての光介入は、認知機能の低下のある高齢者の日中の睡眠時間を減少させるのに有効であるが、エビデンスの質は「非常に低」である。

軽度から中等度の認知症高齢者に対する訪問リハビリテーションは、本人のQOLの改善に有効であるが、エビデンスの質は「非常に低」である。在宅脳卒中高齢者に対する訪問リハビリテーションは身体機能の改善に統計学的有意差は認められなかった。

在宅認知症高齢者への通所施設での認知訓練は、認知機能の改善に有効であるが、エビデンスの質は「非常に低」である。

多職種協働による薬剤処方の評価と見直しは、施設入所高齢者の入院者割合の減少に有効であるが、エビデンスの質は「非常に低」である。

在宅COPD療養者への遠隔支援は、COPDの増悪による入院在院日数の減少、不安およびQOLの改善に有効である。在宅慢性心不全療養者への遠隔支援は、抑うつ症状の改善に有効である。在宅2型糖尿病療養者への遠隔支援は、HbA1cの改善に有効である。エビデンスの質は「非常に低」である。

在宅慢性疾患高齢者のACPは終末期医療に関する話し合いならびに事前指示書作成の促進に有効であるが、エビデンスの質は「非常に低」である。

在宅認知症高齢者の家族介護者に、BPDSの行動マネジメントへの理解を促すことは、介護者の介護スキルの向上、介護負担感の軽減に有用であるが、エビデンスの質は「非常に低」である。

在宅認知症高齢者への専門職によるケアマネジメント支援の生活の質ならびに在宅生活の継続期間、入院、入所、医療・介護費用軽減への有用性を検討したが、いずれも統計学的有意差は認めなかった。

【考察】 10項目のCQについてシステマティックレビューを行い、量的、質的統合を行った。採択研究数が少ない、盲検化が困難でバイアスリスクが高い、サンプル数が小さいため効果推定値の確実性が損なわれるという課題があった。エビデンスの確実性は限定的であるが、改訂版ガイドラインはケアの受け手の価値観や意向を尊重しつつ、科学的根拠を見極めた在宅ケアの実践に貢献するものと考えられる。